神の暇つぶし

鯖味噌汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神の暇つぶし

【Ｎコード】
Ｎ０７２１Ｇ

【作者名】
鯖味噌汁

【あらすじ】
暇だから。それがこの戦いの理由。

プロローグ

人は罪を犯しすぎた。
人は生態系の頂上に常に君臨しようとする。
人は他の生物を漁り、他の生物から漁られない。
人は動物を好きなように飼い、好きなときにむさぼる。
人は自然から離れすぎた。
人は身勝手。
人は自暴自棄。
人はなぜ自分達に疑問を持たなかったのだろうか。
人は猿から進化したとしたなら、現在の猿はなぜ未だに猿なのか。
人はきれいごとを言う。自分を偽る為に。
人は偽善者。例外無く。
人は全て馬鹿である。自分が神に操られていることも知らずに。
人は馬鹿者。例外無く。
人は自らが不完全なことをわかっていながら完璧を目指そうとする。
人は運命に逆らおうとする。神に握られているとも知らず。
人は絵空事をよく語る。現実という地獄から少しでも抜け出すために。
人は現実逃避者。例外無く。
人は何かと一番を目指す。とりつかれているかの如く。
人は自分達の存在さえわかっていない。
人は神が暇をつぶすためだけの道具だということも。
人はそれだからおもしろい。

一章

一章

いい加減、俺もこの生活に嫌気が差してきた。
毎日、決められたことを決められた時間だけ決められた役割にそってやらされる。
学校とはそもそもなんなのだろうか。
生徒に教育と集団生活の知恵を教える？
「最後に先生からのお話です」
違う。
大人達は、ただ危険で放っておけない子供達を学校という名の檻に閉じ込めているだけ。
自分達が子供だったことも忘れて、ただ生きるために働いている。
大人って一体何なんだ？
「私は今、お前らの先生では無い。ただこの衣を着て活動しているだけの神だ」
ほら来た。
誰でもこんなことをやっていればそうなってしまうのは当たり前のはずだ。
人は規律を作りたがるのに、自由を求めたがる。
この世界を表すのなら、「矛盾」という言葉しかない。
「現時点では信じなくてもいい。
だが、これで信じられるか？」
無機質な金属音が机に反響する。
剣だった。
それも奇形の。
「お前らにはそれで殺し合いをしてもらう。
ルールは簡単。生き残れ」

「先生、冗談はよしてください。
期末前なんですから、さっさと授業をはじめましょう」
やつが今しゃべった学級委員長を指差す。
学級委員長は机に突っ伏した。
いや、倒れた。
「これからサバイバルをするわけだ。一人でもいないほうがいいだろ？」
声が聞こえてきた。
違う。頭の中に流れてきた。
「あなたの持っている神刀は雷刃裂です。
あなたが願えばそれだけで人間なら十分即死する雷を流すことができます。
もちろん、あなたにはそのままでは効きません」
テープがきれたように我に返った。
「今聞かせてやったのは自分の神刀についての説明だ。
それぞれ別々の能力がある。神の刀だからな。
さあ、さっさとはじめろ。殺しあえ」
全員、黙っていた。
「あ、あの、冗談抜きで本当なんですか？」
「もちろんだ。
あと一時間以内に決心がつかなかったやつは全員溺死させてやる」
全員、黙っていた。
黙るしかなかった。
「これは脅しじゃない。それに二次元の世界でも無い」
「それよりも質問がある」
俺の横にいる上総が声をたてた。
「なんだ？」
「これとか、学級委員長を殺したりしたので神っていうことは半分、信じてやる。
だが、何のために俺達に殺し合いをさせる？

神なら上で黙って人の願い事を聞いていればいいだけじゃないか」
「人の願い事を聞いてやる、だと？」
やつは嘲笑した。
「人は私に作られた暇を潰すための道具、つまりは駒だ。
駒をどうしようが、プレーヤーの自由ではないか」
「ま、確かに神に勝手に作られたんなら、今の猿が猿なことが説明できるな」
「お前、少しはできるやつらしいな」
「どうもありがとうございます神様」
やつは教室をまわりはじめた。
「どうした？人を殺すのが怖いのか？
人に『死ね』と普通に言って、実行できないのか？
所詮、人間はその程度の偽善者だったか。
このまま全員皆殺しにするのもそれはそれだが・・・あまりつまらないな。
では、こうしようか。
生き残った者は願いごとを一つ叶えられる・・・どうだ？」
全員、黙っていた。
「どうした？怖いか？
一つ言っておくが、これはチャンスでもあるんじゃないのか？
日頃から嫌だと思っていたクラスのやつをこの手で八つ裂きにすることができる。
憎いあいつのはらわたを割っ裂いて、好きなだけその血をすすることができる。
しかも、生き残ったら好き放題できる。
夢が、たった三十二人の命を背負うだけでできるんだ。
簡単とは思わないのか？」
「てめぇ、さっきからいい気になりやがって！」
上一郎がやつに自分の神刀を持って襲い掛かった。
「ていやぁぁぁあ！」

その動きは空中で停止させられた。
「無様なものだ。神に逆らうこと・・・それがどういうことだかわかっているにも関わらず、こいつは逆らった。
さぞかし目立ちたかったんだろうな？
人になど、良心という物はもともと存在しない。
あるのは偽の良心だ。
ちょうどいい。今からお前らがこれからすることを見せてやる。
まずは一回殺すとしようか」
上一郎の体があやつり人形のように垂れ、こちらを向いた。
やつがその首をつかんだ。
生々しく、通常では聞けない音が教室中に響いた。
上一郎の胸はすでに上下しなくなっていた。
「吐きたくなったら遠慮なく吐け。
そうしたほうが気分はよくなるかもしれないからな」
やつは人差し指で十字をえがいた。
見たことの無い鮮血の量とともに、理科の教科書でしか見たことの無い風景がそこに広がっていた。
何もかも真っ赤だった。
やつはまた人差し指で「一」の字を書いた。
喉元の管が切り落とされ、内臓が生臭い匂いと音と共に床へ落ちた。
やつが手で虫を払うような仕草をすると上一郎だったモノがベランダへと続くドアへと叩きつけられた。
赤黒い液体がドアのガラスにこびりつくと共に、もう上一郎では無いモノが不自然な姿で下に落ちた。
悲鳴も何も無かった。
「どうだ？やはり怖くなってしまったか？
・・・違うようだな」
俺の首筋に何か生温かいモノがこびりついた。
後ろを振り返ると、そこには後ろにいたはずのやつの首から下の

胴体と自分の神刀を振りきった状態の疾風がいた。
柔らかくも無く、硬くも無い物体が俺の足に触れた。
不思議と、悲鳴も何も無かった。
「ようやく決心がついたか」
「決心はついています。
もともと同窓会でクラス全員を水素爆弾で爆死させる計画を考えていましたから。
その計画はやらなくてもいいことになりました。ありがとうございます。神様」
疾風は周りにいるやつを次から次へと殺していった。
俺達は教室から逃げ出した。
疾風からではなく、殺人鬼から。
遠くで疾風の声が聞こえた。
「神様、命を短くする代わりに強くなる契約などはできますか？」
「・・・もちろんだ」

俺は町の中を走りに走り、誰もいなさそうな路地裏に一人で逃げ込んだ。
地面に倒れこむと共に、疲労が襲ってくる。
心臓の音が耳に痛いくらいに響いた。
「はぁはぁはぁはぁ・・・っはぁはぁはぁはぁ・・・・・・」
手を地面につこうとしたところで、右手に冷たい感覚が走った。
そこを見た俺の顔をクラスのやつが見たら、度肝を抜いただろう。
そこには剣・・・神刀・・・雷刃裂があった。
あいまいな頭の本をめくる。
雷刃裂を自分の手で持ってきてなど無かった。
「・・・確かに、武器が無いと話にならないからな。
少しはいいこと・・・してくれるんだな」
俺は雷刃裂を握る。
日本刀よりははるかに大きいのにも関わらず、重さはせいぜい野

球バットくらいしかなかった。
「願えば人間が即死する雷・・・か」
俺は近くにあったポスターの切れ端に剣先を向けた。
「・・・流れろ」
特に音がするでもなく切れ端に火がつき、数秒もしないうちに灰になった。
ポスターの切れ端だったものは、炎天下の空の一部となった。
「即死とはまだ言い切れないな」
ゴミ袋のわずかな音に体が強烈に反応した。
どうでもない、ただの野良猫だった。
「試せるな」
俺は猫の鼻の先に雷刃裂を向ける。
今から自分が捕らえて食べるものと同等のことをされるとも知らず、猫は黙って俺を見つめていた。
「流れろ」
カメラのフラッシュ程度の光を目に感じたあと、猫は一言も発することなく炎に包まれた。
三毛ではなくなったそれの目は白濁した瞳で虚空を見つめていた。
辺りには来る前よりいっそう焦げ臭い匂いが漂っていた。
「十分だな」
あれほどの電流があったにも関わらず、体は何の異常も感じなかった。
それよりも黒焦げになった猫の惨殺映像を目の当たりにしても一切同様していない自分が少しおかしいように感じられた。
自分でやったのからかもしれないが、慣れほど怖いものは無い。
今までのことを再認識してしまった瞬間に今までに体感したことの無い気持ち悪さがこみ上げてきた。
口の中に酢を原液のまま舐めたような酸味が広がる。
今朝何を食べたかがはっきりわかった。
「・・・もう少し、しっかり噛んで食べたほうがよさそうだな」

体をさらに軽くしてしまいそうな気がした俺は、路地裏を出ることにした。

「・・・・・・」

平日だというのに制服で町中をうろついていたら、不審に思われるのは間違いない。

それより、右腕が重い。

「・・・雷刃裂が手から離れない・・・？」

自分の右手首の断面を拝む気にもならなかったのでそのままにすることにした。

「ちょっと君」

左肩を叩かれたので左肩をおさえるが、反応が無かった。

振り向くと、やはり知らない人であった。

声をかけてきているところを見ると、私服警官らしい。

「・・・わかりました」

俺は両腕を手首のところでクロスさせて警官に突き出した。

今の状態だと警官に守られているほうがかなり安全といえる。

「いや、別に午前中に学生が出歩いていただけで逮捕するわけにはいかないからね」

驚いた。

「だって、銃刀法違反じゃ・・・・・・」

私服警官は一歩下がって俺の体全体を見渡した。

「見たところ、持ってるようには見えないが？」

「・・・すみません。カッター持ち歩いているだけでも違反だと思ったので」

「それでは私も逮捕だな」

私服警官は去っていった。

「・・・見えてないのか？」

頭をかいた後に雷刃裂を思い切り振り下ろす。

「・・・！！」

俺の目は雷刃裂の軌道上にある一人の女の子を見ていた。
思わず目を瞑る。
・・・・・・
通行人はそのまま機械的に動いているだけだった。
「当たりもしないのか。・・・雷は当たるのにな」
今すべきことを人の波の一部となりながら考える。
まず、しばらく家には帰れない。
あまりありえないが、誰かが待ち伏せている可能性もゼロでは無い。
それに、家に帰っているところを襲われたりしたら家族を人質にとられる。
そうすれば、俺はもちろんのこと、家族も危ない。
あとは・・・学校にも行けない。
もしものときは敵の盲点をつくこともできるが、現時点ですることではない。
もっともな話、行きたくないと思っていたのだからむしろ歓迎するべきだ。
「親戚をあたるか・・・・・・」
制服のポケットを確認するが、一円たりとも入っていることは無かった。
もともとチャリ通いの身。制服に金が入っていることなどコンマ一秒たりとも無かった。
「・・・野宿になりそうだな」
橋の下や半永久的に閉まったままのシャッターの前に住んでいる人と同じことをこの年でやることになるとは、想像もしなかっただろう。
「路地裏に戻るとするか。手ごろなのがありそうだ」
自分で建てた家はどんなものでも少しは立派に見えるものだと知った。

「水と用足しは近くに公園があるからいいが、食料はどうするか・・・・・」
目の前にピンク色に照り光っている生き物だったものはあるが、野良のためどんな寄生虫がついていてもおかしくはない。
俺はそれの上を覆っていたものの上に座りなおした。
自分で剥いだことを考えると少し生々しい気もするが、もろ天然のため、人工のものよりははるかに保温性がいい。
「盗るしかないか」
俺は雷刃裂を目の前に掲げた。
刃に光が反射して俺の目が見える。
「これが伸びるやつだったらよかったんだがな」
普通の剣ではありえないほどジグザグになってはいたが、どうやらこの神刀にあれ以外の能力は無さそうだった。
「・・・頼り過ぎか」
現代において、金がいかに重要なものであるかをようやく知った。
金で全ては買える、と言ったやつがいるそうだが、まんざらでも無さそうだ。
実際問題、やつは、願いを叶えてやる、と言った。
完全に信じきるかどうかも微妙なところだが、少なくとも「願い」と聞かれて金を思い浮かべなかったやつはいないはずだ。
金・・・・・・
クラスの中に金でものを言わせているやつがいた。
まさしく、湯水のように金を使い、友好関係も恋愛関係も群を抜いてよく、勉強も出来た。
しかし、勉強が出来るのと頭がいいのは違う。
そいつは、親の会社が倒産して家庭が借金苦に陥り、小遣いが前と違って全くと言っていいほどなくなってしまったがために全ての関係を失った。
金の切れ目は縁の切れ目、という言葉がよく似合うだろう。
結局、そいつは家族揃って心中したという。

・・・人間なんてそんなものだ。
自分の欲を満たすためだけに人との関係を作り、それが満たされないと知ると切り捨てる。
・・・やつの言うこともあながち間違ってはいないのかもしれない。
だから・・・というと言い訳にしか聞こえないかもしれないが、俺は人と常に他人以上、友達未満の関係しか作らないようにしている。
彼女もいたにはいたが、そいつもその関係に他ならなかった。
なんでも、そういう俺の他とは違う生き方に憧れを感じたらしい。
愛は偽り。
それも俺の頭の中に常にある。
それもさっき言ったような自分の欲を満たす為だけの関係に他ならない。
きれいごとに過ぎない。
口で何度、愛している、好きだ、と言ったところで、内心では別のことを考えているに決まっている。
両想いなど、二次元で十分だ。
・・・俺は相当馬鹿な人間と思われていることだろう。
自分以外のものは全て信じない。
いや、自分さえも信じていない。
そんな人間、いない。
夜風が鋭く体を刺した。
夏でも、夜は寒い。
俺は体力的な消耗よりも精神的な消耗で数秒とかからず寝てしまった。
目を開けたらあの世でもいいと思った。

二章

二章

天然の皮はやはり人工の物とは比べ物にならないことを改めて知った。

しかし、それでも寒いものは寒い。

日が照っていないのなら当たり前とも言えるが。

「夜明け・・・か」

通常であればこういうものは全てが終わったあとに見るもの・・・と相場は決まっている。

俺はもう終わっているのかもしれないが。

一応、胸に手をあてて確認してみると、脈を打つ音が手を伝わって確かに聞こえた。

・・・他の連中は大丈夫だろうか。

命を賭けたサバイバルをしているのにも関わらず、敵のことを考えるのも変な話だが。

考えてみると、今現在、寒くて風邪をこじらせているやつも数名はいるのかもしれない。

敵の戦力が減るのに越したことは無いが。

腹の異常を感じて歩き始めた。

盗る、といってもやってみたことがないのだから、どうすればいいのかわからない。

「テレビの特番でも思い出しながらやってみるとするか」

実際、テレビの警察の特番はされる側にとしては好都合といえるのでは無いのだろうか。

こういう素振りをするやつは万引きするやつだ、というのを堂々と公言するのはいかがなものだろうか。

現に、素人の俺でも簡単だった。
朝の空いている時間帯なら、逆手をとって行動しやすいというもの。
ましてや、大してでかくない地域のスーパーであればなおさらだ。
若干、四十代後半の異性の目が気になるが、無視しておく。
そういえば、別に盗らなくてもいいことに気がついた。
少し目をひいてしまうこととなるが、試食品を食べればいい話だ。
さらに、今は開店直後。まだできたてだ。
少し苦労して盗った食物を元の場所に返す。
しかも、時間が経つと見つかる可能性も零では無い。
よくよく考えてみればここは俺達の通っている高校の生徒がよくパンを買いに・・・・・・
まずい。
今現在、どこから狙われているかわからない。
自分の気の抜けかたに腹が立った。
しかし、今は意地でも寝ておかなくてはならない。
出会い頭に襲われないように野菜コーナーを抜け、そのまま真っ直ぐ進む。
空気に似合わない異常な緊張感と興奮状態が続く。
すれ違う人、一人一人に疑いをもってしまう。
こいつの後ろに誰か隠れてないか。
変装じゃないのか。
気圧差で生じる風が体に当たった瞬間、
今まで聞こえてこなかった鼓動がようやく聞こえてきた。
ようやく暖まってきたばかりだというのに、首筋は場違いに冷えていた。
食料調達・・・新たな手を考えなくてはいけないようだ。

非日常的体験により、腹の異常がさらに高まる。
そういえば、「減っても減ってもなくならないものは?」と、五、

六年前によく出した覚えがあった。
一週間もすればそのネタが尽きてしまうことはわかってはいたが。
で、食料調達。
本格的に四千年前に戻ったほうがよさそうかもしれない。
しかし、それでは本当のサバイバルになってしまう。
今でも本当は本当だが。
ここから山に行くには・・・ざっと二時間というところか。
ふと目をそらすと近くにまだ舗装されていない川があった。
このあたりには珍しく、川底が見える。
近くにあるこれまた珍しい水田からさっと拝借し、生きているまま投げ込んだ。
・・・何匹かいるようだ。
別に俺はボーイスカウトをやっていたわけではないが、釣り竿の作り方ぐらいなら心得ている。
竹、竹・・・無い。
このあたりに無いのだとしたら、どこで覚えたのだろうか？
田舎にばばあがいるわけでもないし。まあ、ここでも都会から見れば十分田舎だが。
足元にあったどちらかといえば棒状の石を足であげ、同時にイナゴを・・・・・・
・・・取れなかった。どちらも。
虻蜂取らずとはまさにこのことだろう。
誰もいなかったことだけでも感謝しなくてはならない。
雷刃裂で・・・無理だ。
川魚の警戒範囲外では多分届かない。
仕方なく、石を拾おうとして屈んだ瞬間。
ついさっきまで胴体があった辺りのところを何かが高速で通り過ぎた。
その行く末はわかっているようでわかっていなかった。
細い棒状の鉄のようなものに羽のようなものがついた、

矢だった。
「・・・やっぱり、一発じゃ、当たらないよね」
振り向くと、そこには水田を一枚挟んで不可思議な形をした弓を持った梓がいた。
「殺そうとしたのか？俺を」
「そうじゃなかったら何？」
梓の顔には自己嫌悪の表情がありありと出ていた。
「音波は何にも気付かずに、すんなり逝ったよ。
今と同じくらいの距離で」
「・・・梓、お前は何のために人を殺す」
「自分が生き残りたいからじゃないかな」
梓は少し微笑んだように見えた。
「結局人間って、あいつの言う通りの動物なんだよね。
だから、私も他人を犠牲にして生きてきた。
今も昔も、同じ」
稲で風が見えた。
「・・・俺は生まれた瞬間からそう思っているから、別にその観念を気にはしない。
だが、お前はいいのか？
俺は死にたくは無い。だから、お前と対峙するだろう。
だが、その時はまだ早い。聞くべきことが色々とある。
もう一度聞く。お前はそれでいいのか？
ただの女子高生として生きていくんじゃないのか？」
「ただの女子高生として生きるなら・・・その方法をとらなきゃいけないんだと思う。
友達と話を合わせるために、携帯いじって、メールやって、人を罵る。
その友達が嫌いだから、っていう理由で私もその人を嫌いになる。
シカトする。
その人が前に仲良くしていた人でも、それはそれで構わない。

前の関係が壊れても、今が大丈夫ならそれでいいから」
一度、梓は言葉を区切って、なびいた髪をかきあげた。
「・・・みんなわかってるんだよ。きっと。
そうしなくてもいいはずなのに・・・どうしてもそうしてしまう。
そうじゃないと生きていけないような不安に陥るから。
そうやって、人はみんな同じように生きて、同じように死ぬんだよ」
「つまり梓は、それをわかっている正しい人間だっていうことだ」
梓は大きく首を横に振った。
「そうだけど！そうだけど・・・・・・・
私だって、普通に生きたいって思うのは変わらないよ！」
もう一度あげた梓の顔には涙が光っていたように思う。
「そうやって生きたいけど、そうやってなんか、生きていけないよ・・・・・・」
「孤立するから・・・か？」
無理に笑顔を作って梓が言った。
「一人になるのは好きだよ。でも、一人になるのは嫌だ。
一人になるのが嫌だったら、みんなと同じことして、同じ服着て、同じ髪型しなきゃいけない。
じゃなきゃ、いじめられるに決まってる」
「いじめられるのは・・・嫌いか」
梓がいつもの表情に戻った。
「マゾじゃないから。私」
「当たり前だろうが」
「冗談、通じないんだね」
「・・・・・・・
ここからは俺の持論・・・ということになるが、
『いじめ』は必ずしもマイナス以外の何物でもない・・・というわけでは無いように思う。
・・・昔話になるが、俺もそういう時期があるにはあったからな。

俺は道の端しか歩かないやつだったからな。・・・はずれるときもあったが。
それは辛くないわけなかったさ。でもまあ、へこたれることは無かった。次の日になったら忘れてたからな」
後ろを向いたら、矢が消えていた。
「結局いろいろあったが、二年もすれば無くなった。・・・ターゲットが変わっただけだったが。
結論を言わせてもらうと、『いじめ』は良い人生を歩むためには必要不可欠と俺は考える。
それによって、人間の『正の心』と『負の心』を知ることができたからな。
それと『いじめ』を乗り切るにはポジティブ思考か、俺みたいにすぐ忘れる頭が必要だと思う。
ネガティブ思考だと、その『いじめ』はマイナス以外の何物でもなくなってしまうからな」
「演説ありがとう」
「どういたしまして」
梓の表情が強張った。
「・・・あと聞きたいこと無い？」
「無い」
「・・・わかった」
梓が弓を引くとその両手の間に銀の矢が生成された。
矢が俺の遥か脇を飛んでいった。
俺は雷刃裂を構えると畦道に沿って全力疾走した。
たまに来る際どい矢を走って避けながら、畦道をひた走る。
こけかけながら最後の角を曲がると、そこには焦っている梓の姿があった。
膝の屈伸運動によって梓に飛びかかる。
梓が目を閉じながら弓で雷刃裂を受け止めた。
「・・・受け止めた！？」

「案外非力・・・なのね」
そんなわけはない。
男子で考えると平均的な運動能力ではあるが、女子で考えると上級ランクに食い込む。
いくら運動部と帰宅部との対決とはいえ、それはありえない。
「・・・全員が戦闘になると人間業じゃない身体能力を生み出せるらしいな」
考えてみると、俺達はもの凄いことをやってのけていた。
弓道部でも無い梓が鉄製より重いかもしれない矢を放ち、
わずか十メートル先から飛んでくる矢を避け、
百メートルはあろうかという畦道を八秒とかからず走り抜け、
五メートル以上膝の力だけで跳んだ。
今考えているこのことも、通常より二倍以上速いスピードで駆け抜けていく。
梓が雷刃裂をはね返し、俺は数十メートル以上吹っ飛んだ。
間髪入れずに梓が飛び掛ってくる。
慌てて横転すると少し粘質の地面に弓が風と共に刺さった。
刺さってくる弓を片手で受け止め横に投げる。
梓の体が空中で横転しながら地面に叩きつけられた。
すかさず立ち上がると雷刃裂を梓の顔面目掛けて振り下ろす。
梓が弓の柄の部分で受け止める。
チャンスだ。
「流れろ！」
梓の体が大きく仰け反り、顔に悲痛の表情を浮かべながら腰を地面に叩きつけた。
「・・・・・・」
自分でも無意識のうちに、俺は梓の左手首を握っていた。
脈打つわけもない。
首に手を当てる。
脈打つわけもない。

自分がどんなことをやっているかなど考えもせずに胸に耳を当てる。
脈打つわけもない。
殺した。
殺したんだ。人を。
「・・・・・・・」
この手で。
この神刀で。
この雷刃裂で。
「・・・・・・・」
こんな調子で、生き残れるのか。俺。
三十人の命なんて背負えるのか。俺。
「・・・なあ、梓。
やっぱり、俺も他人を犠牲にして生きてしまったよ」
他人では無いクラスメイトの死。
しかも、自分の手によって。
もう生き返ることは無い・・・クラスメイトの死。
今なら、動かないはずの親友に思わず語りかける親友の気持ちがよくわかる。
「お前の、自分らしく生きたい、という願いは見事に尽きてしまったが、
俺の願いは決まった」
俺は梓の目を閉じてやった。
「二年五組、三十三名を全員元に戻してやる。
何事も無かったように」
梓の体が砂となって昼下がりの空に散っていく。
「疾風は、俺達を殺す気らしいが、それでも構わない」
不思議と止めようとかそういう気にはならなかった。
「やつにも逆らえそうにないしな」
最後の一欠けらも無くなった。

「そうしたら、背負わなくてもよくなるからな。
・・・逃げだと言うなら言ってくれ。
それに、許さないだろうが、謝る。
人生で最初の懺悔をお前に捧げてやるんだからな。感謝しろ。
ごめん」

爪の間に砂が入ったまま、俺は梓がしとめてくれた魚を焼いていた。
無論、火を起こしているのは帰り道に見つけた粗大ゴミのガスコンロだ。
「魚にありつけても綿を取らないで、苦い思いをしながら食ってるやつがいるんだろうな」
ふとそんなことを思ってみたりする。
なんだかんだでサバイバル術は自然と身についていたのかもしれない。
・・・誰かのために何かをする。
考えてみればこれも人生で初めてのことだ。
他人以上、友達未満という関係のやつだったが、クラスでは中心でも無ければ端でも無いグループの聞き手側にいたやつだと思う。
・・・今、生存者数は一体何人なんだ？
「現在二十五名」
説明を受けた時と同じ声が頭の中に流れた。
便利な機能だ。
ということはあいつ以外に四人・・・か。
一人でさえもこんなに感傷に浸ってしまうというのに、この先本当に大丈夫なのだろうか。
これから殺す・・・いや救ってやるやつはそんなことを考えないようにしなければいけない。
・・・正義者ぶってるな。俺。
誰か一人ぐらいいないと、話にならないんだろうがな。

三章

三章

次の日の目覚めは最悪だった。
起きてそうそう、激臭が鼻を突く。
いや、この激臭のせいで起きてしまったのかもしれない。
匂いの元は案の定、昨日食べた物の中身だったものだった。
適当に穴を掘って埋めてやるとすぐに消えたのが良かった。
「腹・・・減ったな」
よくよく考えてみれば昨日はいろいろなことがありすぎて魚一匹しか食べていない。
梓を・・・考えるだけよそう。
それで食料を確保しているやつはいないはずだ。
・・・はずだ。
とりあえず、昨日行った場所に行くしかないな。

・・・命中。
しばらくは魚だけの生活が続きそうだが、まあ、いたしかたない。
本当は塩と醤油が欲しいところだが、それもいたしかたない。
流れてきたそれを掴もうとする。
が、見事に指先をすり抜けていってしまう。
今度は足を一歩前に出す。
届かない。
さらに足を一歩出すと、
足が少し冷たくなった。
「うへっ！」
奇声とともに前に出した足を陸地にあげようとすると左足が朝露で濡れた草で滑った。

ああ。
何考えてたんだろうな俺。
近くから枝なり何なり拾ってきてえらと口に突っ込んで引き上げるか、
もっと近くによってから捕ったらよかったのに。
その後、
俺の耳には夏休みにしか聞くことのない音が響いた。

「・・・・・・」
ズボンまでしか濡れなかったからよかったものの、一枚だと下だけが異常に寒い。
もちろん、貴重なガスコンロは食料を焼くためだけに使った。
天日干し、というのがなんとも情けない。
コインランドリー・・・それぐらいは大丈夫かな・・・・・・
いや、それ以前にこの格好が問題か。
この格好で襲われたら・・・どうしようか。
「よう。こんなところでどうしてる？」
思わず振り向いた先には上総の姿があった。
「上総か」
「なんだよその殺気の無さは。
せめてお前のやつを構えるぐらいしてみろよ」
仕方なく構えてやる。
「せっかくズボンが干されてたから何事かと思ってやったのに。
大丈夫だ。俺もそんな格好のやつ殺す気にもならないからな」
「そりゃ結構」
上総が横に腰掛ける。
見るとその手には神刀が無かった。
「お前、神刀は？」
「俺の神刀？これだ」
そう言って手を俺の目の前に突きつける。

「何も無いじゃないか。それとも、目に見えないぐらい小さくなっているか、
　または見えないのか？」
「お前は考え方が一般的過ぎるんだよ。
　神刀は刀だけじゃないからな」
　もう一度上総の手を見る。
「その・・・手袋なのか？」
「正確に言えば『玉砕手』だな」
「なんでもかんでも玉砕ってわけか」
「そういうことだ。例えば・・・・・・」
　上総はガスコンロを上に放り投げた。
　口出しする暇も無く、ガスコンロが音をたてた。
「どうだ？」
「お前・・・何やってんだよ」
「何って、玉砕手のすごさを見せてやろうと――」
「馬鹿言え。
　俺はガスコンロをぶっ壊したことにキレてんだよ」
「ガスコンロ如きがどうかしたか」
　俺は上総にデコピンをくらわせた。
「何だよ」
「ガスコンロ・・・持ってこい」
「は？」
「持ってこい！粗大ゴミ置き場から」
　上総が破片を見て考え込む。
「そんなに重要な――」
「ものだ」
　俺は上総を蹴飛ばした。
「絶対拾って戻ってこい。
　でなければ俺はお前を生きかえさせない」
「わかったわかった」

「ほいよ」
早速、ガスボンベを振ってみる。
なかなかの手応えだった。
「・・・やるな」
「それじゃ、やるか」
「・・・二言三言ですることじゃないがな」
「それが『今』っていうもんだ」

「死場を求めて何とかはさまよう・・・か」
「どっちの死場になるかは決まったことだが」
「お前か」
「馬鹿言え」
俺達は上総の提案により、電柱の上で向かい合っていた。
「まさか、バランス感覚まで良くなっているとはな」
「俺達は神に等しい存在なのかもな」
「あいつと同等に扱われたくはない」
「同感だ」
風も吹いているというのに、俺の右足はしっかりと電柱の上についていた。
「お前・・・何人殺した？」
「一人・・・救った」
上総はいかにも、あきれた、という仕草をした。
「お前はもうネジが外れやがったか」
「そうなのかもな」
俺は雷刃裂を構えなおした。
それに続いて上総も姿勢を変える。
「ところでこれ、見られないか？誰かに」
「見られたところで、サツに『電柱の上に人が立っていました』と言っても信じないだろうしな。

第一、立っていたところで何も罪はない」
珍しく、まともなことを言う。
「ところでお前、玉砕手の威力はどのくらいなんだ？
剣だと想像しやすいだろうが、軍手はな・・・・・・」
「軍手じゃない。玉砕手だ。
殺った後にそいつをかっ割いてみたら、上一郎より遥かに悲惨なことになっていた」
「破裂・・・か」
「破裂、なんていうちんけな言葉で済むもんじゃないぜあれは。
殺ったやつの腹の中にいるやつまでかき混ぜられてて、
ただでさえでかい腹が三つ子じゃないか、っていうぐらいに膨らんでたな」
・・・・・・
「・・・今までに殺したやつは何人だ」
「一人」
「戦闘経験、運動能力共に同じ。
違うのは精神と脳と運・・・か」
俺達の意思を示唆することなく、戦闘ははじめられた。
二人ほぼ同時に電柱を蹴る。
電柱が傾いでたてた不思議な音が耳に入ったころにはすでに上総が目の前にいた。
二人の重さに耐え切れずに電線が音を出してしなる。
上総は雷刃裂を掴んでいた。
またもやほぼ二人同時にお互いの武器を退ける。
上総の体が一気に電柱三本分遠ざかった。
今度は上総が先手を取る。
受け止めきれずに後ろに倒れる。
電線に辛うじて左手でつかまるが、それが真逆の意味になってしまった。
左手を玉砕手が掴む。

「残念だったな」
脳に今まで感じたことの無い、止め処ない感覚が押し寄せる。
「あああぁぁぁぁぁぁぁあああああ！！」
足から地面につけたからまだよかったものの、俺の体はそんなところじゃなかった。
「痛い！痛い！！！痛い！！！！！痛い！！！！！！」
うずくまりながら必死に叫んだ。
左手の間接からは白い物と赤い物が顔を出していた。
「いくら感覚と力が強くても、体は元のままだからな。
どうだ？殺して欲しいだろ？痛くて痛くて仕方がないんだろ？」
「・・・まれよ・・・・・・」
「は？」
「黙れって言ってるのがわからないのかよ！！」
「おー怖」
シリアスな展開に拍子抜けする声が浮いていた。
後ろから少しずつ、にじり寄ってくる。
「人はたかだが指一本でも無くなると戦えなくなってしまう弱すぎる生き物だからな」
わかっているのに・・・わかっているのに何もできない。
痛い。
それしか無かった。
「やれやれ。あっけないぜ。
あっけなさすぎるぜ。
せっかく死ぬんなら、せいぜい無様に命乞いぐらいしろよな」
「・・・お前、そんなに殺人欲が強いやつだったのかよ」
「死ぬ最後まで突っ込むか。
俺達、漫才組んでもよかったかもな」
上総が後ろを向いた。
「さてと、記念すべき二人目ということでどうやってこ・・・・・・」

上総が背中を向けたまま俺の方を向いた。
顔がゆがんでいた。
ゆっくりと視線を下へと落とす。
背中へと突き刺さる刃。
雷刃裂に他ならなかった。
「どうやって・・・殺すんだ？俺を」
一気に首元まで切り上げる。
赤い雨と共に崩れ落ちるように様々な物体が中から出てくる。
「・・・き・・・・・・」
最後の言葉はたった一文字だった。
シャツが見る間に赤色に濡れていく。
「くっ・・・くっ・・・・・・」
髪の色も染まっていく。
「くっ・・・くっ・・・くっ・・・・・」
俺という空間そのものが同じ色に染められていく。
「くはははははははははははははははははははははははははははははははは！！」
わからない。
「はははははははははははははははははははははははははははははははははははははは！！」
わからないが、
「あーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは！！」
ただただ、狂気に笑っていた。

四章

四章

狂乱の理由は今でもわからなかった。
痛みに苦しんだが故の結末なのか。
殺人、という行為に快感を感じたのか。
・・・後者は出来るだけ避けて欲しいところだ。
しかし、１００％前者、とは言い切れないのが現状だ。
それにしてもこの手、狂乱した後に見たら既に治っていた。
戦闘で完璧な力を発揮して同等の戦いをして欲しい、という考えに他ならないだろう。
救った後から二、三時間が経ち、すっかり辺りは夜になっていたが、まだ立てなかった。
梓のときとは何かが違った。
罪悪感、責任感、使命感。
全てが薄れていた。
代わりに何かが溢れていた。
・・・立てない。
体に力が入らない。
手も完璧に治っているというのに、立てなかった。
ただ、無意味な思考が頭をよぎって打ち消されていく。
無意味、という言葉に他ならないことしかしていなかった。
しかしこの服、どうしようか。
服はもちろんこの服しか無いわけだが、既に深紅に染まっている。
ついさっきから降りだした雨も、ただただシャツに染み込んで色を滲ませていくだけだった。
寒い。
この雨が全てを流してくれはしないだろうか。

真っ白に。
全てを真っ白に。
何もかもなくして、何もかも忘れて、何もかも消されて。
自分の存在さえも真っ白にして、消してはくれないだろうか。
寒い。
そうすれば、全ての罪が許されるだろうか。
何の責任も真っ白にして。
逃げだと思われようが、構いはしない。
言われたら、そっくりそのまま言葉を返せばいいだけの話。
誰もが何かから逃げて、誰もが何かを追いかける。
寒い。
彼ら、私達、彼女、彼、お前、自分。
永遠に逃げつづけて、永遠に追いかける。
例え死んでも永遠に。
永遠に。
寒い。
「そんなところに座ってたら、風邪ひくよ？」
首は何とか動いたが焦点は動かせない。
「おーい」
声だけが聞こえてくる。
「シカトしないでよー」
無視しているわけではない。
「動けないの？」
見ようとはしている。
「しょうがないなぁ」
見ることが出来ないだけだ。
「男の人って、重いんだね」
「・・・ない・・・・・・」
見知らぬ天井が広がっていた。

「起きたんだ」
相手は女のようだが、私服のせいで誰だかわからない。
「成葉だよ」
周りにはメルヘンな物ばかりが置いてあった。
どことなく、男とは違う匂いが広がっていた。
女の部屋だからと言って匂いを嗅いでしまうのは自分でもおかしいとは思った。
突然こっちに成葉がよってくる。
躊躇もせず、成葉の顔が俺の顔に近寄ってくる。
俺より少し温かい、
唇
ということはもちろんなく、成葉の額が俺の額に触れた。
「熱無いね。よかった」
「て、手で計ればいいだろうが！」
「ごめん。別な方考えちゃった？」
「な、なわけないだろ。
というより離れたらどうだ？」
成葉が俺から離れていく。
少し後悔したことは言うまでも無い。
「とりあえず、お兄ちゃんに着替え借りてるから。
少し大きいかもしれないけど。
も、もちろん私は手伝ってないからねっ！」
「誰もそんなことは聞いてないだろ」
「そ、そうだよね」
学年でも指折りということはまんざらでも無いらしい。
「お前の家か？」
「そうだよ。
空家にこんないいところなんてないよ」
体を動かそうとした瞬間、
場違いな音が部屋に響いた。

成葉の動きが止まる。
「やっと気付いた？」
俺の体は鎖でベッドに縛り付けられていた。
「せっかく私の大好きな人を殺すんだから、じっくり最後まで見てたいなって思って」
鎖で縛られている感覚が全く無い。
「別にさっきのついでにキスとかしてもよかったんだけど、
最後の最後で私が汚しちゃうのはどうかなって思ったから」
成葉が俺にかけられていたかけ布団を取っ払う。
「大丈夫だよ。麻酔が効いてるはずだから。
最後まで自分のワタをじーっと見ながら逝かせてあげる。
それに、初めてじゃないから」
メスが怪しげに光る。
「それじゃあ行くよ」
メスが自分の体に当てられて滑らかに割いていく。
確かに見ているのに感覚は無い。
まるで、幽体離脱をしているようだった。
「すごい！すごいよ！こんなにきれいなの見たことないよ！
・・・見たいよね？」
俺の是非を問うでも無く、まざまざと心臓を見せ付けられる。
恐ろしいというより、グロテスクというより、とにかく怖かった。
成葉が俺の心臓を愛しそうに舐める。
「こんなに小っちゃくてきれいでかわいいけど、こうやっちゃうとね・・・・・・」
成葉が俺の心臓を少し握る。
首を絞められたときともまた違う、苦しみが体中を走る。
「くっ・・・う・・・・・・」
少しずつ握る力を強めていくごとに痛みが強烈になっていく。
「そんな声出すんだー。
ますます好きになっちゃったよ」

「やめ・・・ろ・・・よ・・・・・・」
「ここで止めたら止めたで死んじゃうだけだよ？」
「いいから・・・やめろ・・・・・・」
「いくら大好きでもそのお願いだけは叶えてあげられないよ」
成葉が俺の心臓を慎重に置いた。
「どうしようかなぁ。
こんなにきれいだと迷っちゃうよ。
でもやっぱり、こういうのは爪から先に剥がすべきだよね。
それじゃあ一回縫うよ」
両親が医者とは言え、あまりにも手際がよすぎた。
「せっかくだから、丁寧に一枚一枚私が剥がしてあげる」
成葉が俺の右手を手にとって頬擦りする。
「よかった。爪長くて。
切ったばっかりだったりすると、すごくやりにくいから」
成葉がかなり錆びている大き目のペンチを取り出す。
「この下、めくってみようか？」
爪をつかまれる。
次に来る衝撃に備えて、体中が痙攣していた。
「・・・いくよ」
指の先から何かが無理矢理引き剥がされる。
想像していた痛みなど、比べ物にならなかった。
「あああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
この前の時は神経まで一緒に切れていたせいなのか、数倍、数十倍、数百倍痛かった。
「いいよ！いいよ！！すごくいいよ！！！
こんな声聞けるなんて夢みたい！！」
成葉は最後の半分を一気に引き剥がした。
声にならない痛みが体中を貫いた。
「一気にやっちゃうと聞けないんだ。
その顔だけでも十分いいけど、やっぱりじっくりやってあげるよ。

じっくり・・・じっくり」
そう。まだ一枚目。
あと九回。場合によっては十九回。
「この前一気にはがしたらどうなるのかなって気になって試したら、死んじゃったから少し休ませてあげるね」
あと九回あと九回あと九回あと九回あと九回あと九回・・・・・・
そればかりが思考を巡っては消え去っていく。
成葉がカーテンをめくって外の様子をうかがう。
少し落胆したように見えた。
「ごめんね。こっちにも、もう手が回ってきちゃってるみたいだから、
私の神刀ですぐに逝かせてあげる」
成葉が机の上にある小刀を握る。
「神刀は手にくっついているものじゃないのか？」
「それみたいに大きいのだとそうみたいだけど、私のは投げたりできるから。
投げたら自動生成だし」
成葉が俺の首筋を愛しそうに舐めたあとに神刀をあてる。
「大丈夫。私もすぐに逝ってあげるから。
そしたら、続き、してあげるから・・・・・・」
天高く振り上げる。
不思議と何の感情も無かった。
その手は振り下ろした瞬間に、
肘から先がなくなっていた。
赤い噴水。
「いや・・・いや・・・いや・・・いや・・・いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」
残っているほうの手で躊躇なく刺そうとする。
その腕さえ、同じ運命をたどった。
「何・・・？誰・・・？どうして・・・？なんで・・・？」

成葉が何か言いかけた瞬間に、
もう見てもなんとも思わなくなってしまった断面図を見せて左右に倒れる。
その先には健司と美奈がいた。
「感謝してくださいね」
「してねっ」

五章

五章

「残り十人」
意味も無く検索した結果がそれだった。
すでになんらかの方法で二年五組の二十三人が死んだ。
死んだんだ。
残酷であるにもかかわらず、何も感じない自分がいた。
「十人・・・ですか」
「ところで、こんな状況になっても二人一緒とは驚きだな」
こいつら・・・健司と美奈は恋人同士である。
「大好きだもんねっ。私達っ」
「そうですね」
どう考えても吊り合わない二人である。
天真爛漫と冷静沈着。
どこに共通点が・・・・・・
逆に全く無いのかもな。
「とりあえず、どうやって成葉を殺った？」
「あれはね、美奈が――」
「奇しくも敵同士ですよ美奈さん」
「ごめんなさいっ」
反省の色が伺えない。
「とにもかくにも私達はアンフェアなことは嫌いですから麻酔が覚めるまでは待っています」
「句読点をつけろよ」
「そういう人だから健司くん」
二時間三十分経過。
いつになったら覚めるのだろうか？

・・・もしくは、体が覚めたくないのかもしれない。
「拷問をかけるのであればなぜ麻酔を施したのでしょうか成葉さんは」
「成葉がそんなことするなんて、信じられないよ・・・・・・」
「拷問をするのは罪を償わせるためか被験者の痛みを加害者が楽しむためのものでありどちらとも言えませんが・・・・・・」
美奈が健司を覗き込む。
「私の話、聞いてる？」
「すいません独り言に集中していたので聞こえませんでした」
「じゃあケーキ一つプラスね」
健司が何かを指折りで数え始める。
「もう一ホール買わなければいけなくなりましたね食べられますか？」
「洋菓子一家の娘をなめないでよねっ！」
いくらなんでも限度がある。
「・・・健司、日常茶飯事か？」
「はい一日最低三個は」
美奈に向き直る。
「・・・三食普通に食べるんだよな」
「そうだよっ」
「しかし美奈さんにとっての普通の食事はケーキですのであしからず」
美奈の体を動かしにくい首でなんとか見渡す。
「お前の家って――」
「学校から一キロも離れてないよ」
「朝は――」
「健司くんに起こしてもらってるよ。
もっ、もちろんまだそこまでいってないからねっ！」
・・・物理的にありえない。
「飽きないのか？」

「おいしいもん」
某朝日系列の某テレビ番組に出まくれるんじゃないかと。
「・・・ある程度の雑談が終了したところで寝てはいかがですか？私達が見てますから」
「頼む」
「美奈そんなに起きれないよ」
「大丈夫です美奈さんは寝ていてください私はもともと不眠症です」
美奈が驚きの表情をする。
「そうなの？じゃあ、美奈が毎晩子守唄歌ってあげるよ。家、隣だからいいでしょ？」
「・・・いろいろな面から勘弁願います」
「どういう面だよ」

「遅く起きた朝は・・・ですか」
「おはようっ！」
その二つの言葉には似合わない体勢だった。
「ごめんねっ。健司君がこうしてないと危ないって言ってるから」
俺の首には美奈の鉈がぴったりと当てられていた。
「とりあえずそのまま起きてくださいもちろん動けるはずです」
試しに手を動かそうとしたら手が動いた。
・・・当たり前か。
「ここでやるには狭すぎですので場所を移させていただきます」

町の中心地。
小規模ながらもオフィスが立ち並ぶ地帯である。
「こ――」
「心配はご無用ですこの町の大人達は下しか向いてませんから・・・ご存知かと思いますが」
二人がそれぞれの神刀を取り出す。
「まずは能力紹介といきましょうそちらからどうぞ」

「・・・信用していいのか？」
「別にしたくないのならばしなくてもいいですしかしこれは両者にとって得になる話だと思うのですが」
・・・・・・・
「俺の神刀は雷刃――」
「名前は結構です能力だけどうぞ」
「本人が望むだけで人間に値すると即死級の雷を流すことができる」
「射程距離はどのくらいですか」
間髪いれずに聞いてくる。
「一メートル無いと思う」
「・・・・・・・
私の神刀はこれです」
そう言って乱暴に大剣を取り出した。
「・・・能力は？」
「美奈に預けました」
能力の譲り渡し・・・か。
そんなことが可能だったのか。
「私のはコレッ！」
俺の顔の数センチメートル脇を、何か黒い物が通り抜けた。
「投げたらじどーせいせいされる二つの鉈と、健司君から譲ってもらったとーめいにんげんになれる能力」
そう言った瞬間に美奈の姿が消える。
「どう？」
その言葉は後ろから聞こえてきた。
「始めま・・・しょうか」
「ああ」
後ろを切り裂く風の音。
跳躍すると俺の立っていたところに砂煙があがる。
続けざまに放たれる「ソレ」は音によって判別がつく程度だった。
ワイヤーアクションでしか不可能な壁走り。

難無くこなせても、放たれる「ソレ」の音は無数のガラスを割りながら確実に近づいている。
視界が薄暗くなる。
気配を感じて道路へ跳躍すると付近の木が風と共に切り裂かれた。
速さと遅さ。
正反対だが、吊り合っている。
二人の関係もこんなものだろうか。
考える暇もなく、二人が弧を描いて両方から襲ってくる。
高く跳躍したところで無駄だった。
二人が同時に俺に向かって跳躍する。
その距離、零。
仕方なく美奈の体を蹴って反対側に跳ぶ。
「先・・・行って・・・・・・・」
「・・・わかりました」
わずかにうめくその声もはっきりと聞こえた。
あの距離からの道路激突。
ましてや、強化された足での蹴り。
一本や二本では、済まされない。
・・・仕方ない。
健司の脇を通り抜ける。
「・・・済まない」
「サバイバルですから・・・仕方ないです」
事態を把握しながらも健司はそう言った。
中央車線を飛び越える。
唾を飲み込む音が、確かに聞こえた。
悲痛の表情で美奈の顔が歪む。
その確かな手応えを感じる暇も無く、すぐさま雷刃裂を後ろへ向ける。
手への確かな手応えと共に首筋に生温かいものがこびりつく。
見えてはいなくても、色はわかった。

あまり服が濡れないうちに二人の間から離れる。
「美・・・奈・・・さん・・・・・・・」
「健司・・・君・・・・・・」
二人が死にかけの体で抱き合う。
「あなた・・・に・・・はぁ・・・出来・・・れば・・・私っ・・・・はぁ・・・達の・・・願いを・・・叶え・・・て・・・・もらう・・・ため・・・に・・・はぁ・・・一つ・・・警告して・・・おきます・・・はぁ・・・・・・
がっ・・・こう・・・以外・・・の・・・はぁ・・・場所は・・・行っても・・・無意味です・・・・・・
残り・・・六・・・人・・・の生・・・存者は・・・私・・・はぁ・・・達よりも・・・ほぼ確実に強い・・・・・・」
ここで一回言葉を切った。
「学校・・・以外に・・・生き・・・残る・・・可能・・・性は・・・零・・・と言っ・・・ても・・・過言・・・では・・・ありません・・・・・・・」
最後の言葉が俺に対しての警告とは思わなかった。
「・・・わかった。
苦しみながらもう少し生きるか？楽に早めに死ぬか？」
「もう・・・少し・・・生きるよ・・・・・・
健司・・・君・・・大好き・・・だよ・・・・・・」
「その・・・続き・・・は・・・生き・・・返っ・・・たら・・・言い・・・ま・・・しょう」
二人同時に一瞬で砂へと変わった。
昼下がりの午前。
二人は最後まで、二人だった。

六章

六章

・・・・・・

学校。

初日に考えていたことが、現実になるとは思わなかった。

廊下・・・誰もいない。

教室・・・誰もいない。

職員室・・・誰もいない。

消された・・・か。

生徒が次々と砂になって死んでいく。

そのせいで休校ということも無じゃないな。

気分的に、体育館に行ってみることにした。

空虚な巨大空間。

露出した骨組み。

色あせた校歌。

自分の足音だけが、無駄に響いた。

「どうかしたの？」

「逃げてるの？」

「誰から？」

「何人殺した？」

「何人・・・救った？」

その数、五人。

「残り七人」

残り一人は疾風か・・・・・・

「ねえ、聞いてる？」

「聞いてる」

「だったら答えてよ。ねえ」
今までの感じとは違う、何かが押し寄せる。
「お前ら、何者だ？」
「魅恋」
「理栄子」
「里奈」
「紫漣」
「莉沙」
「そういうことが聞きたいんじゃない」
空気が違った。
「涼青高等学校二年五組で神様主催のサバイバル参加者」
「違う」
「何が言いたいの？はっきり言ってよ」
答えをわかっているのに聞いている。
「お前達の服、一体どうしたって言ってるんだよ！」
赤く染められた服。それにまだ、濡れたままだ。
「決まってるじゃん。
返り血と、
殺した人を食べたときの血だよ」
・・・は？
「お前何を」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ
けけけけけけけけけけ」
「くけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけけ

けけけけけけけけけけ」
壁に反響して、何百人に笑い者にされているように聞こえる。
「い、一体・・・何を・・・・・・」
「おかしいから、笑ったの。
それがどうかした？」
冗談じゃない。
「違うだろ・・・お前」
「何が？どう？わかんないよ？」
答えを知っている。
こいつらは。
「五対一ですか。卑怯にも程がありますね」
「はや・・・て・・・・・・」
まだ赤く塗られたまま先が不自然に曲がっている剣。
見れば頭からも出ていた。
「メガネ取ったら、顔だけはストライクね」
「ありがとう・・・とでも、言うと思いましたか？」
その目は血走っていた。
「いじめに参加する気はありませんから、られる側につくことにします」
「五対二で勝てるの？」
「勝たなきゃ、いけないんだろ？」
俺が構えると同時に五人が構える。
「近・中距離武器のオンパレード・・・か」
「やさしく・・・食べてあげる」
魅恋の舌なめずりと共に莉沙が襲い掛かってくる。
「こっちは一対一であっちは一対四・・・・・・
なめられたもんだな」
二メートル級の刃が頭部めがけて振り下ろされる。
受け止めた瞬間に、腕に電気が走る。
鞘の一撃を髪一重でかわす。

振り向きざまに一振り。
跳んでかわされると、雷刃裂を土台にして後ろへ跳び下がる。
二人同時に相手に向かって跳ぶと空中で鍔迫り合いをしながら下に落ちる。
「食べたいのか・・・俺を」
「食べたいよ。おいしそうだもん」
「成葉によると、俺の内臓はすごくきれいらしいからな。
どうせ食うなら、うまそうに食え」
「言われなくても・・・わかってる」
莉沙を一度薙ぎ払う。
全力で駆ける。
莉沙が神刀を一度鞘に収める。
駆ける。
莉沙が鞘ごと神刀を薙ぎ払うと、鞘と共に体育館の床がものすごい音をたてて切れていく。
真空波。
能力はそれだった。
側転をしてそれを避けると猛然と駆ける。
一本なら、勝ち目はある。
・・・意味は無かった。
二本が一本に減った。
それだけだった。
再び莉沙を薙ぎ払う。
壁に激突すると共に足の力が抜けていっている。
もらった。
左からの音。
バク転すると右の壁に槍が刺さっているのが見えた。
何かに引き寄せられるように槍が本人の手へと戻っていく。
・・・途中で落ちた。
「十分一人だけ構っていれば済んだものを」

莉沙が立ち上がる。
反射的に身構えるが、その目は俺を射ていなかった。
紫漣を、いや、食物を見ていた。
紫漣の顔が恐怖で歪む。
まだ、生きている。
「お願い・・・や、やめて・・・・・・」
懇願するその目は、
一番初めに食されることになった。
腹が切り裂かれ、見慣れた風景が目に映し出される。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
血。
言葉で書き表せないほどに飛び散り、床と服をびっしりと染めていく。
・・・うまいのだろうか。
ふと、そんな疑問が浮かぶ。
しかしその顔は、とてもそんな風には見えなかった。
泣いている。

その顔は、確かに悲しみに泣いていた。
泣いている。
泣いている。
泣いているのに食べている。
わずかに残った正気が泣かせているのか、
現実に悲しんでいるのか・・・・・・
何もわからなかった。
別の場所から勢いよく噴き出した。
四ヶ所。
「始めようか。さあ」

七章

七章

体育館の端に砂の小山が出来ていた。
「残り二人」
・・・・・・・
「・・・お前の願いは何だ？」
「涼青高等学校の二年生を、四組までにすることです」
「俺を殺して自分も死ぬのか？」
「あなたを殺せば、どう足掻いても私は死にます」
・・・・？
「どういうことだ？」
「あなたの耳には私が初日に、命を短くする代わりに強くなる契約などはできますか？、と言ったことが聞こえているはずです。
私の寿命は、あなたを殺した瞬間に尽きることになっています」
・・・・・・・
「いいのかよそれで。
自分をいじめたやつらを皆殺しにして、それで気楽に逝けるのか？
それを耐え抜いたほうが、よっぽどいいんじゃないのか？」
「あなたもいじめの辛さはわかっているはずです。
ただ自分が他の人より違うだけ。
ただ自分が他の人より違うだけで、罵られ、水をかけられ、肩をぶつけられ、集団リンチをうけ、金を巻き上げられる。
私は、それが嫌なだけです」
「いじめたやつを全員殺せば、いじめはなくなるのか？
罪を犯した者を全員殺せば、世界は平和になるのか？」
疾風の頭の血は乾きはじめていた。
「・・・・・・」

「言い返せないじゃないか」
「あなたは何もしなくても、次のダーツが放たれたからわからないのです。
もう次のダーツが放たれない者の気持ちが」
「放たれないのなら、もう持っているダーツが無いということじゃないのか？」
「どういう意味ですか？」
日がかげってきた。
「次のターゲットは作られない。
お前が終わったら、もう終わりなんだ」
「ゲームを楽しむ者にとって、ゲームの終わりは苦痛以外の何物でもないと思いますが」
「楽しみすぎた代償は苦痛で十分のはずだ。
自業自得なんだからな」
こんなことを言って、あきらめてもらおう、なんていう浅はかな考えは持っていない。
しかし、そんなことはどうでもよかった。
「逆に聞き返しますが、あなたの願いは何ですか？」
「このクラス全員を生き返すことだ」
「馬鹿馬鹿しい」
疾風が半ば反射的に言葉を返す。
「サバイバルをちゃらにする・・・ということですか？」
「そういうことだ」
「共通の体験をしていながら願いが正反対とは・・・思いませんでした」
疾風が構える。
「願いをあなたに叶えてもらおうかと思いましたが、そううまくはいかないですね」
「本当か？」
「ええ。本当です」

後悔先に立たず。
俺は雷刃裂を構える。
「始めましょうか。さあ」
その言葉が言い終わらないうちに、俺は天井の鉄骨へと飛び移る。
「能力に差があるのなら環境を利用しよう、ということですか」
「ご名答」
不思議と戦う気が失せた。
「めんどくせぇ」
「戦うことが・・・ですか？」
「ああ。何もかも面倒くさくなった」
疾風が俺の首元に神刀を当てる。
「今なら、楽に逝かせてあげますが」
「それは・・・拒否する！」
一撃を食らわされる前に、疾風の神刀を薙ぎ払う。
しかし、片手対両手にも関わらず、疾風の神刀は一ミリ足りとも動かなかった。
「神様より頂いた能力・・・侮るのですか？」
その場から貫かれる前にバク転して立ち上がる。
そこだけ鉄骨が落ちていた。
風景を脳へと送る暇もなく、疾風の神刀が頬をかすめる。
「毒の能力が無いのが幸いでしたね」
その言葉を言い切ったのを確かに聞いた後に、俺は鉄骨から飛び降りた。
「流れろ！」
鉄骨は鉄である。
多数の切れ込みがある体育館の床へと着地する。
目を上げた瞬間に、神の力を思い知った。
「甘いです」
疾風が神刀を横に振る。
何もこない。

だが、何かが来る、と強化されていない第六感が告げた。
しゃがみこんだまま側転をすると後ろの壁に空の目ができた。
「避けましたか。やりますね」
その言葉を言い始めた瞬間、既に俺は駆けていた。
ここでは勝てない。
それ以外の何も考えていなかった。
後ろを振り向くことは出来ない。
だが後ろに誰かがいることはわかっている。
見えなくても、聞こえなくてもわかっている。
等間隔で並ぶ若干灰色がかった白色のマスを駆ける。
階段の一段目を踏み切り板代わりにして、二階の手すりを軸にして二階へと上がる。
それでもついてくる。
駆けても、駆けても、駆けても、駆けても。
見えも聞こえもしない存在。
存在という名の疾風。
恐れを覚えていた。
理科室。
ここなら決着をつける術はある。
床より少し灰色な柱に左手をかけ、扉を蹴破る。
「移動しても変わりないと思いますが」
少しも驚かなかった。
見えない真空波。
第六感のみで避けるのも限界がある。
肩が、腕が、足が、少しずつ切れていく。
「寄せ付けてはもらえない・・・か」
「能力が分かった以上、そうするのが懸命でしょう」
傷が少しずつ深くなっていくたびに痛みが滲むように無くなってくる。
神経までは切れていないはずだが・・・なぜだ？

これが・・・能力？
・・・だいぶ匂ってきたな。頃合いか。
俺は雷刃裂を掲示されているセピア色にあせたポスターへと向ける。
「流れろ！」
念じた瞬間に爆風で吹き飛ばされる。
散乱したガラス片が傷に食い込んだ。
「くっ・・・・・・」
後ろに降り立つ音。
「策などお見通しです。
ガスと火など、子供でも思いつくではありませんか」
「子供だからな」
「精神年齢で十分です」
痛がる足もろとも引きずりながら、俺はなおも駆ける。
はっきり言って今の俺の頭では、答えは二つしか導き出せない。
一つは次にすること。
もう一つは最後にやるべきことだ。
ガラスを蹴破って外へ出る。
一つ一つの破片が、場違いにまぶしかった。
二階のベランダへと到達する。
調理室。
ドアを蹴り飛ばすと、床にガラス片が散らばった。
その中に、彼の顔が映った。
「何をしているのですか？」
痛んだ体に鞭打って、第六感が示すがままに動く。
そのまま準備室へと突撃する。
あった。
「くらえ！」
見つかったら銃刀法違反になるであろうものが彼の額に向けて飛んでいく。

・・・当たった。
刺さった、ではなく、当たった。
「・・・・・・」
軽い音が響いた。
「・・・・・・」
疾風の額には少し瘤が出来ていた。
「・・・正直言って、この展開にそれは無いと思いますが」
「・・・せめてグサッといったほうが、お前としてもまだよかっただろうな」
予想外。
実際、映画とかではよくこうはならないものだ。
二の舞をしないように、ダーツのように投げる。
片手で全て防がれてしまった。
「ギャグもそこそこに終わりですか？」
「・・・・・・」
残るは最後の案。
ここからならすぐだ。
問題はどうやって近づくか。
「そこからは、もう逃げられませんよ？」
準備室に扉は一つしかない。
窓も何も無い仕切られた空間。
生徒を危険にあわせないための工夫なのだろうか。
疾風が少しずつ歩み寄ってくる。
「最後ぐらい、堪忍したらどうですか？」
疾風の足がもう一方のベランダのドアへと差し掛かった。
今だ。
少しの距離を駆ける。
考えていることは一つだけ。
疾風の神刀が刺さる。
考えていることは一つだけ。

ドアに向かって駆ける。
考えていることは一つだけ。
疾風を神刀ごと抱えたまま飛び降りる。
考えていることは一つだけ。
プールの水が勢いよく跳ねる。
考えていることは一つだけ。
「流れろ！」

・・・・・・

「終わりましたねぇ。神様」
「死へと追い詰められた人間。その生き様と足掻こうとする力、全て見せてもらった」
「で、生き返した後にどうするつもりですかぁ？」
「０．１上げる」
「太っ腹ですねぇ」
「あれほどのことをやってもらったのだから、仕方が無いと言えば仕方が無い」
「で、引退・・・みたいなものですかぁ？」
「お前にも見えない存在になる、というだけだ」
「寂しくなりますねぇ」
「お前には補佐がいるだろ？」
「・・・あれですかぁ？」
「辛抱しろ」
「・・・はぁい」
「ではな」
「・・・最後に聞きたいんですけどぉ」
「何だ？」
「続き・・・やっていいですか？」
「・・・好きにしろ。だが、必ず０．１上げろ」

「わかりましたぁ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0721g/

神の暇つぶし

2010年10月8日14時19分発行